キャラメル・ドーク

CARAMEL DOG

挨拶

初めまして。友麻ランです。今回初のナルト本。それもヒノエナミちゃんとの合同誌。付き合いが長い割りには、なかなか一緒に本を作ることがなかったので、今回は念願！叶ってホクホクです。それも大好きなヒナタ本。私の強い押しのせいか…。トホホ。ヒナタ巨乳超希望の歪んだ性癖者ですが、以後お見知りおきを。

はじめまして。こんにちは。岸本氏に描くムッチムッチボディに欲情を隠せないヒノエナミです。
今回は友麻サンと合同誌です！知り合って７年程経ってるのに今回がはじめての合同だったり・・・実は妙にキンチョーしてるんです。
やさしくしてください。

キャラメルトーク

FIRE DOG BABY!!

by:nami.h

その日のヒナタは
いつもと違う
においがした

もう少し
いてもいい
・・・？

いや・・・
違うと言うより
なにか混ざった
ような匂い

オレの知ってる
・・・

あー・・・

まぁ　早い話
家に帰りたく
ないってか・・・

いいぜ！
ついでに晩メシ
食って帰れよ

えっ!?

そこまで悪いから
い・いいよっ・・・!!

いーんだって!!
今日は親が出かけてて
いないからさ
メシどうしようかなーって
思ってたんだ
ヒナタ作ってくれよ
あ・・・
それなら
人にゴハンなんて
作ってあげたこと
ないから…
キバくんの口に合うか
わからないけど…
・・・・
なぁー…
?
家で
またなんか
あったのか?
…う!?

きゃっ…!?
あっ…
熱っ…
わっ わっ…
っっ
…!?
ばっか…
びしょお
何やってんだよ!!
あっ・・・ごめんなさい 手がすべっちゃって・・・・・・
ったく…んな言葉だけで動揺すんなよなっ!! ちょっと聞いただけだろ
ゴメン・・・・・・
・・・うん
でも・・・
わたし・・・・ 別に何も・・・・
あー… そだ… それか
演習後 ネジにまた なんか言われた
!!?
あっ…

あんな奴の言うことなんか
気にすんなって!!
無視しとけばいーんだよ

ムシだ
むし!!

ちがっ…

違うの!!
兄さんじゃ…

…?

…だって
あの人とは

ちゃんとした
会話も・・・
していないもの

家だって　そう…
何も変わらない

わたしだって
変わってないの…

居場所は
ないまま…

・・・・・・

はじめは
こいつのこんな性格も
イラついたけど…

仕方ないよなぁー…
オレなら実際
あんな所出ていくぜ

イヤ
マジで
野宿生活の
方がまし!!

別に　オレが
どうこう出来る
問題じゃねーし
あまり関わりたくも
ないけど…

なんか
ほっとけないん
だよなぁー…

ムズッ

ドクン
ドクン

また…
だんだん強く
なってく

キッ・・・・
キバくんっ…!?

あのっ…!!
なんか…っ
そのっ…下

はっ!?

下・・・?

・・・・・・・

↑元気

ナゼニー!!

ここっ…
これは別にお前に
対して変な気が
あるわけじゃなくって
だなー…!!

あっ…わたし
大丈夫だから…!!
気にしないでっ…

はふわ

お…男の子だし
いろいろあるよね…

なんだよそりゃ…
こっちは気にすんに
決まってんだろー…

前かがみ

えっ…!?
もしかして
わたし臭い…!!?

ガーン…

だいたい
こーなったのは
お前のニオイのせい
なんだからな…!!

イヤ…
キーゆーんじゃ
なくって…

なんだろ…
わかんねーけど
それに反応した

はぁ——

だめだー

こんな状態じゃ
一緒にいらんねー…

ヒナタ お前
もォ
帰れよ!

ミシ
ミシ

えっ!?

そんなぁ…

紅センセイ
お仕事でいないし
シノくんの家
知らないし…

ぐし…

・・・・・

そんな顔すんなよ…

オレだって好きでこんなこと言ってんじゃー…

くいっ

!?

ヒナタ 北てめ〜っ

はなせよ…マジ限界なんだって…

ぐぐっ

キバくん…わたし…本当に大丈夫…

あっ…その…わたしはじめてじゃ…ないし…!!

ちょっとぐらいムリしても大丈夫だからっ…何でもするからここにいさせてっ…!! お願い!!

!!?

だからっ…なにが大丈夫なんだよっ!? やっちまうぞ

オラー

ぎゅーっ

あっ…!?
思い出した!!
このニオイ…っ
やばっ・・・!?
獣になりそー!
ひっかいちまう・・・っ!!
なんだよそーゆーことかよ…
本当にいーんだな!?後でなに言ってもしらねーぞ…
ゴク
…言わないよ

ビクッ
…!?
あっ…
れろ
れろ
ヒ…
ヒナタ…
ジュポ
ジュポ
ズズ…
くっ…
ドクッ
ビュッ
ビュッ
ゴクン

なれてる・・・・・

ガーン・・・・

ネジ　お前・・・

こいつにナニやらせてんだよー・・・

ってオレもだけど・・・

・・・・・・

はぁ

はぁ

ぬるっ

ぐりっ

・・・ッ!?

ぴくんっ

あっ・・・

チュック

チュック

チュック

ここ・・・・・
気持ちいいのか・・・・？
くぱっ
ビクッ
んっ・・・!?
きゃっ
・・・・・・
かぁっ
コクン
ヨイ・・・
・・・・
ブルッ

こいつこんなに
かわいかったっけ…!?

あ…あのっ

キバくん…
ここ…っ

はぁ

はぁ

くちゅ

はっ

はっ

ぬぷぷぷ

あ…あっ…

どくどくどくどく

あっ…

あっ…
ぶっ…
あっ…あっ!!
ズッ
ズッ
ドクッ
ふぁ…
あっ…
あ…んっ
ドクッ
ビクッ
ビクッ
ぶる
くそっ…
おさまんねーよ…
ヒナタ…
ヒナタっ!!

うんっ・・・!!
いいよ
そのまま続けて
あっ
ズリ
ズリ
あっ・・・
抜かないで・・・
あ・・んっ
ズッポ
ズッポ
あ・・あっ
パーン
パーン
ジュッ
ジュッ
ジュッ
ジュッ
きゃうーっ
あっ・・・
やぁ・・・あ
いっ・・・
いくぅ・・・!!
あっ

ドピュッ!!
ビュルビュルビュッ
あっ
ああー…っ!!
ハアー…
ズルン
ハアー…
つかしーな…まだ…?
ぎーっ!!?
なんじゃこりゃーっ!?
オレのチンコが血だらけっ…!?
えっ!? うわっ
あ!

アレ 始まっちゃった・・・・みたい

えぇ!?

えへっ

ああ・・そりゃ・・・

クラッ

!?

ブシー

コーフンもするわな・・・

でもこれじゃ!! 大じゃなくエザル

じ・・じゃあ わたし帰るね

シーツ取り替えといたから ゆっくり休んで・・・

ゆっくりって・・・

ムリだろ!! この部屋 ヤバすぎ・・・

すっげーニオイが こもってるよ・・・

こりゃ 当分 寝らんねーな・・・

ガタッ

ブーン

スッキリしたけど 後味ワリィー・・・

・・・・・・・・

まだ元気

しっかし・・・・

ニヤルトにあらずし

よく考えてみたら オレの方が あいつらより 一緒にいることが 多いのに・・・・

なんか ムカツク・・・

胡蝶蘭

友麻　ラン

胡蝶蘭

ネジは笑わなくなった。そしてヒナタも笑わなくなった。理由は2人ではなく、運命といえばそうかもしれない。色んな感情に翻弄されて、2人は本当の気持を見失ってしまった。
ヒナタは自信を。卑屈になった心は呆気なく清らかな心を蝕み、侵していった。
ネジは信じる心を。真っ直ぐだったはずの心は、愛情を憎しみに捻じ曲げてしまった。
初めて会った時のことを思い出せば、淡い恋心は憎しみの思い出に消されていく。

ヒナタは怯えたように笑った。
ネジの腕がヒナタの腕を掴み、逃げようとする足を払った。
「兄さん…」
何度も繰り返し、ヒナタがそれを覚えるようにと。
「嫌です。嫌です」
諦めたような瞳でネジを見つめ、されるがままに愛撫を受け、少女の喘ぎを漏らした口は、抵抗することを覚えた。
「いつものように大人しくしなさい」
ネジの歪んだ愛情は憎しみに変貌し、その捌け口を男の精を受けさせることで昇華させようとしていた。
口調は変わらず冷静で、掴む腕の力は痣ができるほど強い。
「嫌なんです…兄さんは私が嫌いなのでしょう?」
「私に好かれたいと思っているのですか?」
ヒナタは首を振った。
「いいえ…憎まれて当然だと思っています。でも…」
ヒナタは俯いていた顔を上げ、ネジの憎しみと怒りしか映さない瞳を見つめた。
「この行為がおかしいことに気付いたんです」

胡蝶蘭

ネジの表情は、今更だと言いたげに口の端を歪ませる。
「…私は兄さんに愛されてはいません…」
「私はあなたを愛するためにしているのではない。辱め、私の憎しみを背負ってもらうために私に体を開くのです」
自分の今までしてきた行為を、意思を放棄して受けていたことに胸が痛くなる。何故、初めて抱かれた時に抵抗をしなかったのだろうと思っても、その時にはまだ、ヒナタには未来が見えなかったのだ。
「消せぬ印を付けられ、分家であるからその実力さえ認めてもらえず。これ以上の屈辱がありますか？あなたには決して理解することが出来ない苦しみです。全てを諦めたあなたには」
ヒナタには、ネジの奥深い闇がどこまで続いているか検討もつかなかった。だが、自分には今少しだけの灯りが見え始めたのだ。
手を伸ばしても届かないが、それでも見失わないようにと走り出すことを覚えた。
親にも見放され、兄と慕っていたネジには憎まれ、宗家の長女ということのプレッシャーがヒナタを押しつぶしていた。諦めることでしか解決の出来なかった。だから初めてネジを受入れされられた時でさえ、泣きもしなかった。
「兄さんの苦しみは私には計り知れません。でも…私には…」
「あなたは何を勘違いしているのです？訓練中の仲間があなたを少し必要としてくれているからといって、勘違いをしているのでは？」
見透かされた心。ヒナタの顔が真っ赤になり、自信を持ち始めた瞳は打ち砕かれ、俯いて涙を堪えていた。
「そっ…それでもいいんです…」
ネジは掴んだ手首を高く上げた。
「あなただけが、そんな生温い夢を見ることは許さない」

胡蝶蘭

ヒナタは声を上げるつもりだった。
私には光が見えていると、憧れる人のそばへ行ってみたいと。
だが、ネジはその瞬間さえも与えず、ヒナタの体を動けなくさせてしまう。
「服を脱ぎなさい」
見失ってしまう不安と、今からの行為への恐怖。
「…いや…いや…」
「本当は、この行為が好きだから怖いのでしょう?」
ヒナタは耳を塞ぐ。
「そんな大きな服を着て誤魔化しているつもりでしょうが、あなたの体は私と体を繋いでから確実に女の型になっている。その大きな胸は隠し様がないですね」
あきらかに嘲笑うネジの言葉にヒナタの自我が奪われていく。
「いつ子供を産んでもおかしくはないですね」
「いっ…いや…」
怯える瞳をねじ伏せることに一種の快楽を覚えてしまったネジは、まるで猫のようにその生を弄ぶ。
「他の男と結ばれようなんて愚かな考えは捨てなさい」
ヒナタの頭に黄色い後姿が浮かぶ。憧れて、好きだと想い始めた存在。
「服は脱ぎません…」
見失うほうが怖かった。自分であるために決心した全て。
「ききわけの悪いことを言う?…。私はあなたの体を傷付けたくないんです。心さえ傷ついてくれればいいのです」
ネジの手が上から下へと振り下ろされた瞬間　その指先の通った道に布が切れていく。
「きゃぁっ!」

胡蝶蘭

首から体の中心にまっすぐに服が切られ、ヒナタの肌が露出する。大きく白い胸が慌ててかき合わされた布の隙間から覗く。

「恥じらいなど必要ありません」

ヒナタは自分の心の中をネジに知られているような気がした。

「兄さん…兄さんっ…」

怯えれば追ってくる。受入れればその先を要求される。拒否すれば、全てを奪われる。

「助けを請うても誰も来ませんよ」

ネジの長く白い指がヒナタの手を掴む。それはさっきと違ってただ、胸を覆っている手を柔らかく外すような力だった。

「私と肌を合わせたくないなら、何故ここに来るのですか?」

呼ばれるまま、足を向けてしまったネジの部屋。何度も乱暴に体を奪われているのに、昔のように楽しく話せるのではないかと期待してしまう。ヒナタは自分の中の矛盾に目を伏せた。

「ごめんなさい」

「謝れても困ります」

ネジはヒナタの態度に苛つく。何に対しても本気にならず、すべて諦めることで解決していく姿勢が嫌いだった。宗家という生まれながらの地位にありながら、それすらも放棄してしまっている姿を見ると、ネジの心は言い様のない怒りに満ちてくる。

宗家の人間を自分の思い通りに動かして、辱め、力でねじ伏せたかった。でも、それは誰でも良かったはずなのに、何故かヒナタでなければいけなかった。ヒナタ以外ならただの憎しみだけで済むはずなのに、ヒナタだけは、その全てを奪ってしまいたくなってしまう。

自分に抱かれ変化する体。女の型をした白い肌。

「誰かに身を委ねることは許さない…」

胡蝶蘭

ネジは小声でヒナタを威嚇し、白い胸を両手で鷲掴んだ。
「ひやっん…！」
ネジに爪が食い込むぐらい掴まれ、指の間で乳首を挟まれる。
「もう…乳首が硬いですよ？」
ネジはヒナタの両方の乳首を引っ張り、その先を爪先で擦った。
「やっ…あっ…」
怯えて青白くなっていた頬は、ネジの行為で徐々に赤くなっていく。
「兄さん…やめてぇ…」
怖いと思いつつ、何故かここへ来てしまう。触れられる矛盾を感じながら、何故かその手を払えない。
抗うのは声だけで…
細い肩から布が落ちた。細い腰にあったものまで床に落ちた。ネジの髪がヒナタの頬に当る。項に手を回され、良く似た形の唇が合わさった。舌が口内でゆっくりとお互いを探り合う。ヒナタの手がネジの背中に触れようとして、そのまま下に落ちた。そして、いつもの通り人形のようにネジにその体を差し出す。
「それでいいのです…」
ヒナタは目を閉じた。
ネジは何も纏っていないヒナタの下半身に手を伸ばし、熱を持ち始めているだろう場所へと指を忍ばせた。柔らかい肉の感触の奥に熱く濡れた場所に当る。
「そんなに気持がいいですか？」
ネジは、ヒナタのクリトリスを擦りながら、中指を密の溢れ出す中心に突き刺す。
「あぁ…あんッ…」
ピチャピチャと水っぽい音が部屋に響く。ヒナタは無意識に足を開き、立ったままの不安定な態勢に耐えながら、ネジの耳元で愛らしい吐息を吐く。この声を誰も聞いた事がないと思うと、ネジの心の支配欲

胡蝶蘭

と優越感が満たされていく。

「にい…さんっ…あっ…だめっ…」

ネジの腕にしがみつき、足を震わせる。ネジの指は容赦なく2本目の指を膣の中に入れ、抽送を繰り返す。指からしたたるように落ちてくる愛液。指を抜く時に締め付ける膣の感触に満足しながら、親指の腹で弧を描くようにクリトリスを擦ると、ヒナタの腰から力が抜ける。

「あぁッ!…そこ…だめっ…あっあっ…」

「こうされるのが好きなんですね。あなたのお父様が知ったらどんな顔をするでしょう。それも分家の私にこのようにされて」

ネジの指がクリトリスの包皮を剥いて、直に充血したそれに触れる。

「やぁぁぁっ…!」

ネジはうっとりと喘ぐヒナタの表情を見つめ、勃起しているペニスを取り出した。

「これからすること分かりますね」

ヒナタは床にしゃがみ込み、眼前に差し出されたペニスを両手で包むと一瞬躊躇い、口に含んだ。

「んっんっ…」

唇と舌の感触にネジのペニスは硬くなり、反り返る。

ヒナタはこうしてネジとセックスをするのが好きな自分に気付いていた。する前では恐怖で、逃げ出したくなるのに、してしまえば、もっともっとネジが欲しくなってしまう。ペニスを愛撫するのさえ、苦痛ではないのだ。…セックスをしている時、ヒナタはネジを愛しいと想っていることに心の中で苦笑した。勘違いにも程があると。

「ヒナタ…」

ネジのペニスを吸い上げ、同時に手で扱き上げる。先端から零れる液を舌で舐め上げ、最後にすう。

「にいさん…?」

胡蝶蘭

「そのままそこに座って、足を広げなさい」
ヒナタの唾液で滑ったペニスは若さを誇示するように勃起し、張り詰めていた。ヒナタはゆっくりと床に腰をつけ、足を開いた。陰毛の薄いそこは赤く充血し、密を垂らした花弁のような色に染まっていた。ネジの喉が鳴る。女の匂いが充満し、ヒナタはそんな自分に気付いた。触れてない乳首はかたくしこり、膣からは垂れるほどの愛液が零れていた。
「自分で開いて見せてください」
ヒナタは床に背をつけて仰向けに寝ると、ネジに向って更に足を開き両手で引っ張るようにして全てを見せた。
「もう、こんなことも恥ずかしくはないのですね」
ヒナタは何も言えなかった。あんなに嫌だと言ったのはこの口なのに、今はそれを望んでいる。
「そのまま開いておいてください」
ネジは床に膝をつくと、開かれた場所へペニスを当てた。
「あっ…あつい…」
愛液でペニスの先端を滑らし、クリトリスを突く。入りそうで入らない、微妙なところでペニスを当てて動かす。
「い…やぁ…あっあっ…にいさん…」
膣がペニスを取り込むため、大きく口を開いて無意味なほどの愛液を垂らしている。
「ふふっ…すごいですよ。忍者には向いてなくても、こういうことは天性の素質があるかもしれませんね」
ヒナタの目尻に涙がたまる。ネジに言われなくても自覚があるのだ。怖かったのは、この行為に溺れる自分に気付いたから。ネジに与えられる好意にだけ反応する自分がいることに気付いていたのに、それを正当化するために憧れの人を追いかけていたのだ。
「あなたはとても綺麗ですよ。こうして私に足を開いているときが…」

胡蝶蘭

本当は最初に抱かれた時に、ヒナタは自分の気持に気付いていたのかもしれない。初めて見る歳が近くの男の子。優しそうな強そうな瞳に心を奪われたこと。

そして、ネジの瞳が自分に向って好意で満ちていたこと。

自分達は、お互いを好きであること。

運命がそれを奪ってしまった事。

「にいさん…入れてください…」

要求される言葉を吐き、ネジは満足気にペニスを挿入した。

「あ…あー…んっあぁっ…」

ネジは確かめるように腰を動かし、ヒナタの中を蹂躙していく。

「いいっ…あっ…あっ…」

覚えてしまったお互いの熱さ。打ち付ける腰に絡む足。自我を放棄して口から声にならない喘ぎを漏らす。そして、何度となく口付ける。

「にいさんっ…だめっ…だめっ…」

体を密着させ、お互いに腰を振り高みへと上り詰める。粘液質のいやらしい音が途絶えることなく続く。ネジの荒い息がヒナタの頬にかかる。このまま気付くことなく憎しみの対象として生きていくことが辛かった。

「にいさ…んっ…ころして…」

このままネジを受入れて死んでしまえば。憧れの人も自分が汚さずにすむのにと。

「ええ…このまま果ててしまいなさい…」

強く打たれ、ヒナタの奥にペニスが届く。

「ひゃぁっ…ーあっあーっ！」

ペニスが奥で弾け、ヒナタは内腿を震わせながら果てた。

胡蝶蘭

ネジのペニスが体内から出て行く感触にさえ、ヒナタの体は感じてしまう。
「殺してくれとは、あなたにしてはよく出来た言葉ですね」
「…いいえ。本当に殺してほしいの」
ネジの瞳がヒナタを見据える。
「…諦めることを諦めたいの。自分が変わることさえ許されないのなら」
「それは私の所為だと?」
「いいえ…」
ヒナタは脱力したまま、目だけをネジに向けた。
「…怯えることも疲れたの。私がいなければ兄さんも心が休まるでしょう?」
「あなたは何も知らないんですね」
ネジは髪をとくと、苦笑してヒナタを見下ろした。それはヒナタに対するというより自分に対しての苦笑に近かった。
「殺しはしません。あなたは私の苦しみを背負う唯一の人間なのですから。誰にも殺させもしません」
ネジはそういうと服を直し、額当てをつけた。
「早く服を着なさい。そして暫く寝てから帰りなさい」
ヒナタはじっとネジを見ていた。
涙が溢れ、押し殺していた感情が溢れ出す。
風が吹き、扉が開く。ネジは無言で部屋を出て行った。

「どうして…どうして…好きだと言ってはくれないの…?」
扉を閉めたネジに、その言葉は届かない。

INFORMATION

★★73フェチ★★

ヒノエナミ
「73フェチ」&「ミルキー★ポルノ」で
ひっそりよろずで活動中！
http://kobe.cool.ne.jp/hinoe73

★BLOODY KITTY★

友麻ラン
月チャン系でホモなお兄さん達の同人誌
つくってます。ひっそり美少女系なんか
出す事あったり。
teddysrock@princess.co.jp

POST SCRIPT

++友麻ラン++++++++++++++++

終わりました。今回は色々とレイアウトさせてもらって楽しかった〜★
小説のネジヒナはハッピーエンドですよ。あくまでも。あと12時間で待ち合わせだけど、手落ちがありそで怖ぇぇ。でも超楽しかった★また一緒にしよーね。

++++++++++++++++++++++++

++ヒノエ　ナミ++++++++++++

ギリギリまで時間を使わせていただきました。そんでもって友麻サン最後まで甘えまくりーのメーワクかけーのすみませんでした。
でも、今回久し振りの合同誌だったのでメッチャ楽しかった。
友麻サンありがとうございました&お疲れさまです。
あっと、ここまで読んでくれた人もありがとう！！

++++++++++++++++++++++++

キャラ雑記ボックス

1st. NARUTO book
HINATA SP.

2001*12*29 on sale

comic*NAMI HINOE
++++++73FET1

novel*RAN YOUMA
++++++BLOODY KITTY

CARAMEL DOG